

河原町埋蔵文化財調査報告書 第2集



鳥取県河原町
郷原遺跡分布調査報告書

昭和 59 年度

河原町教育委員会

序 文

この報告書は、県営八頭中央地区ほ場整備事業に伴い昭和59年度に国庫補助金を受けて実施した、河原町大字郷原地内に所在する埋蔵文化財の調査記録であります。今回の調査は、分布調査ということで資料等、記録的に満足し得る報告書とは言えませんが現地の方々のご理解と、調査関係各位のご指導ご協力により、ここに報告書を発行する運びとなりました。

ご援助いただいた方々に厚くお礼申しあげるとともに、次回の本調査に期待するものがあります。

昭和60年3月

河原町教育委員会

教育長 蓮 佛 金 吾

例 言

1. 本報告書は、河原町教育委員会が県営八頭中央地区ほ場整備事業に伴い昭和59年11月7日～12月10日の間に実施した、河原町大字郷原地内における分布調査の記録である。

2. 調査関係者は次のとおりである。

調査団長	蓮佛金吾	(河原町教育委員会教育長)
調査指導	野田久男	(鳥取県埋蔵文化財センター調査指導係長)
	久保穰二郎	(鳥取県埋蔵文化財センター文化財主事)
調査委員	中村義秀	(河原町文化財保護審議会会長)
	有田研治	(河原町文化財保護審議会副会長)
	荻原伊三郎	(河原町文化財保護審議会委員)
	小谷憲一	(河原町文化財保護審議会委員)
	北村道之	(河原町文化財保護審議会委員)
	大熊一瑛	(河原町文化財保護審議会委員)
調査員	中島弘隆	(河原町教育委員会事務局主事補)
調査協力	(郷原部落長)	有田勝夫
	(土地所有者)	有田美喜、藤原莊平、福田賢一、九鬼武男 西尾正雄、有田守雄、有田研治、有田 司 有田与兵衛
	(作業関係者)	有田静子、有田八重子、有田由紀子 有田節子、有田はる子、藤原智恵子
事務局	西尾繁雄	(河原町教育委員会事務局教育課長)
	小谷和章	(河原町教育委員会事務局教育課長補佐)

3. 調査報告書作成にあたって、野田久男氏にご指導、ご助言をいただいたことに厚く感謝いたすとともに、出土遺物について、久保穰二郎氏にご教示いただいたことに併せて感謝の意を表します。

4. 本書における方位は、すべて磁北を示す。

記号は、トレンチを、Tとする。

5. 報告書は、小谷、中島で協議し、河原町教育委員会が編集、作成した。

本文目次

I 位置と環境	-----	1
II 調査に至る経過	-----	2
III 調査の概要	-----	2
1. 概略	-----	2
2. トレンチ調査状況	-----	2
3. 遺構について	-----	5
4. 遺物について	-----	6
IV まとめ	-----	7

挿 図 目 次

挿図 1	郷原遺跡周辺遺跡位置図	1
挿図 2	トレンチ配置図	3
挿図 3	T-4	4
挿図 4	T-5	4
挿図 5	T-11	5
挿図 6	出土遺物実測図	6

図 版 目 次

図版 I	遺跡全景 発掘作業風景
図版 II	T-1 T-2 T-3 T-4
図版 III	T-5 T-6 T-7 T-9
図版 IV	T-10 T-11 T-12 T-13
図版 V	出土遺物

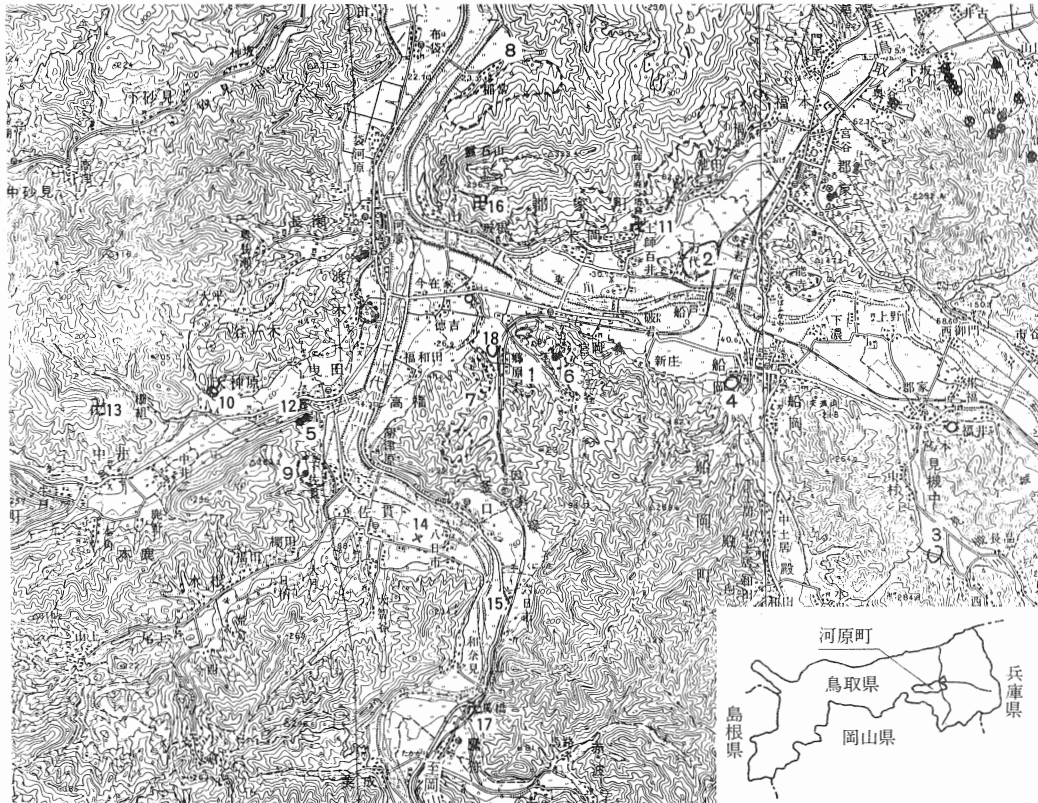
I 位置と環境

郷原遺跡は鳥取県の東部で鳥取市、郡家・船岡・用瀬・佐治・鹿野・三朝の各町村に接した、八頭郡河原町大字郷原に所在している。河原町は大部分が山林原野で覆われ平野はわずかで第一次産業主体の農山村地帯である。

その郷原遺跡が位置しているところは、標高36~50mのなだらかな丘陵地で現況は水田、畑である。縁辺には千代川の支流三谷川が北流しており、下流地帯には扇状地が広がり、そこに郷原集落が形成されている。

郷原部落は、古くは定期市が開かれていたなど生活の要衝として栄えたところである。また、部落内あらゆるところで土器片が出土しており町内でも非常に遺物散布密度が高く、古墳群、遺跡など文化的遺産の宝庫であることが知られている。

このように郷原遺跡近辺には、歴史的背景の中で庶民が営んできた生活によってつくられた文化・遺物などが多く眠っているのである。



挿図1 郷原遺跡周辺遺跡位置図

- | | | | | |
|------------|---------|----------|-------------|-------------|
| 凡 例 | | 1. 郷原遺跡 | 7. 山手古墳群 | 13. 羽黒山妙玄寺跡 |
| X 遺物出土地 | ● 前方後円墳 | 2. 万代寺遺跡 | 8. 稻常古墳群 | 14. 瓦経出土地 |
| ○ 散布地・集落跡 | ● 円墳 | 3. 牧野遺跡 | 9. 大平古墳 | 15. 銅鉦出土地 |
| ▲ 銅鐸出土地 | ⊗ 窯跡 | 4. 丸山遺跡 | 10. 天神原古窯跡群 | 16. 最勝寺 |
| ○ 古墳群 | | 5. 嶽古墳 | 11. 土師百井庵寺跡 | 17. 大安興寺 |
| | | 6. 郷原古墳群 | 12. 式内社兆禰神社 | 18. 前田遺跡 |

Ⅱ 調査に至る経過

昭和52年度より、地域産業振興の一環として、河原町・郡家町・船岡町の3町合同で八頭中央地区ほ場整備事業に着手され、現在事業は継続して実施されている。

これに伴い、昭和58年7月14日鳥取県八頭地方農林振興局長より河原町教育委員会に対し、埋蔵文化財についての協議があった。町教育委員会では、この地域は土師器、須恵器の散布地であることを確認していたことと、いづれ、ほ場整備事業が実施されることを事前に知っていたため、鳥取県埋蔵文化財センター、野田久男調査指導係長、河原町文化財保護審議会委員で事前に現地踏査を行い、地形的環境、遺物の散布状況、また、昭和57年度発掘調査を実施した前田遺跡との関連性等、あらゆる角度での検討を行い、遺跡が埋蔵されていることの確信を得ていた。このため、河原町教育委員会が調査主体となり、国庫補助金を受け遺跡の分布調査を実施することとなった。

本調査地は、そのほとんどが水田であり水稻が作付けされており、稲の収穫を待つて、分布調査を行ったものである。

Ⅲ 調査の概要

1. 概 略

八頭中央地区ほ場整備事業の第7工区のうち、昭和60年度に工事を施行する計画面積は61,000㎡であり、その一部に土師器、須恵器の破片が濃密に散布している区域が含まれている。トレンチは標高44mから49mの丘陵地を中心に設定したものと、地名（石堂、上土居）により設定したもの、また、昭和57年度発掘調査を行った前田遺跡（集落跡）との関連を考慮したもの等、併せて、先ず8本のトレンチ(1.5m×10m)を設定した。掘り進んだ結果、T-4に掘立柱建物と思われるピットを確認したのでさらに遺構の分布をより正確にするため範囲を狭め、6本のトレンチ(2.0×m 10m)を設定し、掘り進んだところ、T-9、T-11、T-12からピット（柱穴）及び、土壇を確認した。

結局、ほ場整備工事で遺構面にまで影響を及ぼす区域は、T-9、T-11、T-13、T-12、T-14及び墓地を囲む近辺であることを把握した。

2. トレンチ調査状況

T-1 調査地域（以下地域）の最北端で町道を軸に前田遺跡（S57年度調査）と対称な位置に設定したトレンチだが、前田遺跡と埋土状況が同じだった。表土下0.30mの深さで地山面（黄褐色ローム）に達したが、遺構は検出されなかった。遺物は須恵器、現代陶器が出土している。

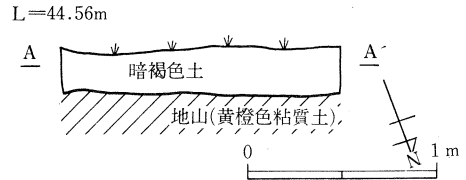


挿図2 トレンチ配置図

T-2 遺物散布畑（地域外）に接する水田に設定したトレンチ。黒褐色砂質土と暗褐色粘質土の混合が激しい土層を成す。ほ場整備で盛土になるので表土下0.32mで掘るのをとどめた。遺構は確認されず、出土遺物は土師器、日本・中国産陶磁器、須恵器、石器等が出土している。

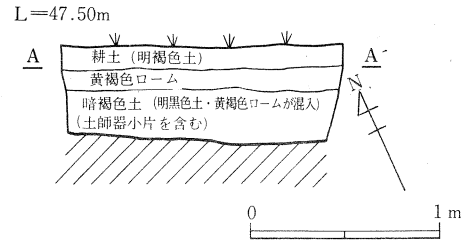
T-3 地域中央部の水田に設定したトレンチ。表土下0.26mで地山を確認したが、遺構は検出されず、出土遺物もなかった。

T-4 地域内唯一の畑地に設定したトレンチ。表土下0.26mの黄橙色粘質土で数個のピット(柱穴)を確認した。出土遺物は少量の須恵器、日本産陶器である。



挿図3 T-4

T-5 遺物散布密度の高い地域に設定したトレンチ。谷間と思われる場所に客土を行った水田であるが、暗褐色土に明黒色土、黄褐色ロームが混入し、土層が明確でない。磨滅した土師器小片が土層全体に含まれているが、出土遺物



挿図4 T-5

の大部分は多量の須恵器片と土師器（高坏）1点である。遺構は確認されなかった。

T-6 古墳のある尾根の稜線から少しはずれた小高い位置の果樹園に沿った水田に設定したトレンチ。表土下0.34mで地山面を確認したが、相当削平されている。遺構は検出されず、遺物も須恵器と石製品の各1点である。

T-7 地域東端で丘陵地（地域外遺物散布地）の低稜線沿の水田に設定したトレンチ。表土下0.23mで暗褐色土の地山に達した。遺構は検出されず、遺物は須恵器が出土。

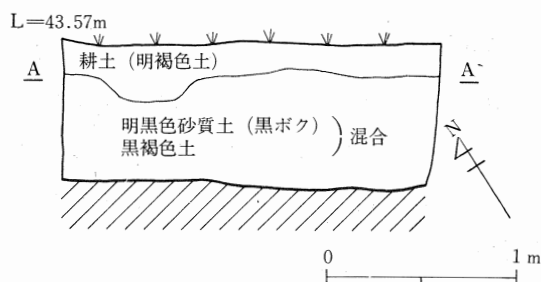
T-8 地域南東端の谷間に設定したトレンチだが、表土下約0.30mで多量の水が湧出したので、1.5m×2.0m 試掘して調査を取りやめた。土師器、須恵器が数点出土。

T-9 遺構を検出したT-4に垂直に設定した2.0×7.0mのトレンチ。表土下0.28mで土壇（竪穴住居か）と思われる暗褐色土の落ち込みとピット（柱穴）数個を検出した。同じ畑に設定したにもかかわらず、全く違う土質・土層である。出土遺物は土師器片と不明石製品である。

T-10 遺物散布果樹園に接した地域南端の水田に設定したトレンチ。T-5と同じく黄褐色ローム、黒色土、暗褐色土が入り混じった層を成す。遺構は確認されなかったが遺物は多量に出土し土師器、須恵器、現代陶磁器いずれも各小片である。

T-11 遺構を検出したT-4に関連して、遺構の広がりを確認するために設定したトレンチ。表土下0.83mの深さで明黒色砂質土（黒ボク）と黒褐色土が混じった全体に

黒っぽい土で、不明確な土層である。ピット（不整形な柱穴）と思われる黒色土の落ち込みを1個確認。出土遺物は弥生土器（甕）、須恵器（高坏）、土師器片、鉄塊である。



挿図5 T-11

T-12 集落形成好適地と考えられる

見晴らしのよい小高い台地状水田に設定したトレンチ。かなり削平されているが、表土下0.24mでピット(柱穴)3個、土坑2基検出した。出土遺物は須恵器片である。

T-13 T-11と同様に遺構を検出したT-4の遺構の広がりを確認するために設定したトレンチ。表土下1.25mを掘るが、黄褐色ロームが北側で0.16m落ち込んでいるなど、変化にとんだ地層である。遺構は確認されなかったが、遺物は土師器、須恵器、現代陶器の各小片数点が出土した。

T-14 小高い丘陵上に設定したトレンチ。表土下0.44mで地山面を確認した。遺構は検出されず、出土遺物はなかった。

3. 遺構について

今回の試掘で検出された遺構は、調査の主旨があくまで分布調査で広がりをつかむためのものであるために、遺構を掘り下げることを実施しなかった。そのために遺構の性格等を確実にとらえることは出来なかった。調査の結果T-4・T-9・T-11・T-12で柱穴をT-9・T-12で土坑を検出した。

〔柱穴〕 T-4・T-9・T-11・T-12で検出。平面形は円形（T-11は不整形）で径0.18m～0.40mと規模は小さい。T-4の柱穴は2間×2間以上で柱間0.90mスパンの掘立柱建物であろう。また時期は現段階では不明瞭であるが、柱穴上面に土師器、須恵器の破片を含んでいる状況から、古墳時代の終わりから鎌倉・室町時代にかけてのものと思われる。

〔土坑〕 T-9・T-12で検出。T-9の土坑は長軸4.50m、短軸1.30m（いずれも推定）を測る竪穴住居と思われるものを一部検出したが、全面発掘していないことと、遺構と地山の見極めが不明確なために全容は明らかでない。T-12の土坑は2基（部分検出）確認した。平面形は丸みを帯びた菱形。

いずれにしても、遺構を掘り下げることによって初めてこの遺跡における遺構の性格、時期などが明らかとなるだろう。

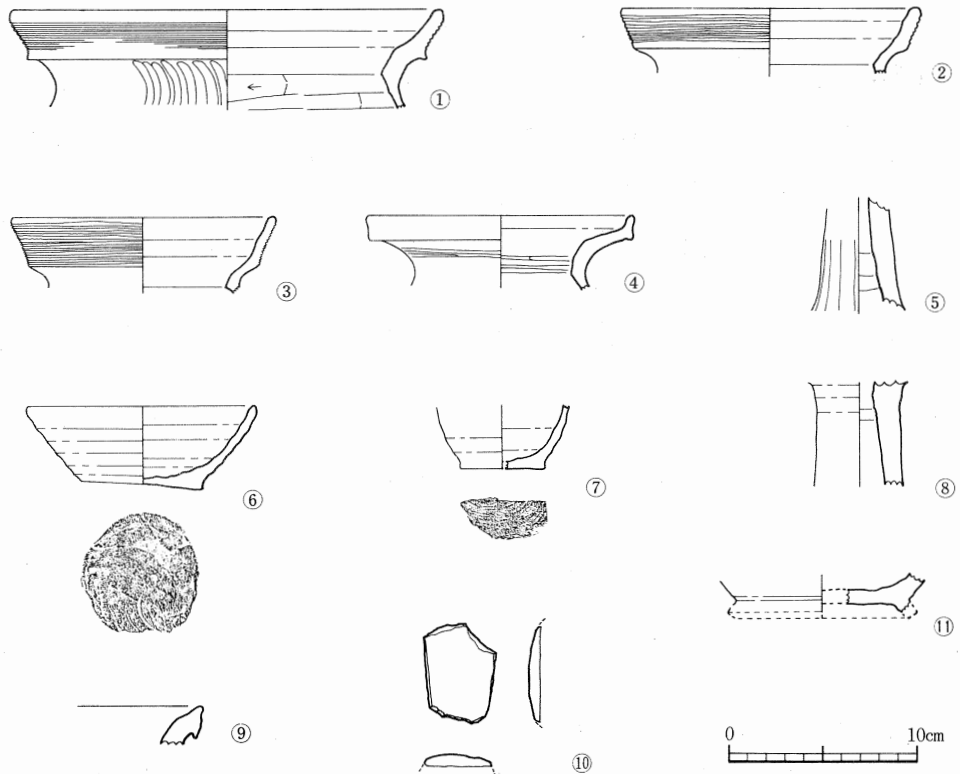
4. 遺物について

今回の調査で出土した遺物は、土器を中心に石器・鉄塊である。土器の出土数量は、破片で297点を数え、弥生時代から平安時代のものである。大半が細片になっており、実測可能なものは極少量であった。ここではその概要を述べることにする。

弥生土器〔挿図6—①～④〕 ①～③は複合口縁を有する甕で、口縁部外面に櫛描平行沈線を施す。①は横ナデにより平行沈線を消そうとしている。頸部以下のヘラ削りは左横方向に施す。すべてT-11出土。復元口径は①が22.6cm、②が15.5cm、③が13.7cm。弥生時代後期末頃のものであろう。④は口縁部はラッパ状に開く壺で、口縁部端部はほぼ垂直に立ち、口唇部は丸くおさまる。頸頭以下にはヘラ削りが認められる。耕土出土、復元口径14.0cm。弥生時代後期末頃のものであろう。

土師器〔挿図6—⑤〕 ⑤は高環の脚部破片で、外面にヘラ磨きが見え、赤色で塗色され、内面にはしぼり目が認められる。T-5出土、古墳時代中頃のものであろう。

須恵器〔挿図6—⑥～⑩〕 ⑥は高環の脚部破片で内外面共に横ナデを施す。T-11出



挿図6 出土遺物実測図

土、古墳時代後期頃のものであろう。⑦は、出土土器唯一の完形品の坏で、内外面共にやや強めの横ナデを施し、底部には回転糸切り痕が見える。T-11出土、口径12.0cm、底径6.5cm、器高4.4cm。平安時代のものであろう。⑧は小壺で内外面共に横ナデを施し、底部に回転糸切り痕を有する。T-5出土、復元口径4.5cm、平安時代のものであろう。⑨は胴部破片の坏で、内外面共に横ナデし、底部には、「ハ」の字状の高台が付いている。T-5出土、奈良～平安時代のものであろう。⑩は、甕の口縁部破片で内面横ナデし、やや外反する。T-2出土、古墳時代後期のものであろう。

石製品〔挿図⁶版V-⑪〕 ⑪は石器であろうと考えられるが用途は不明である。背面を丸く磨いている。

Ⅳ ま と め

郷原遺跡分布調査で得たことは、調査の主旨どおり遺跡の広がりを把握し、今後ほ場整備や遺跡の保存等に影響が出ないようにするための対策的資料であった。

実際に調査を行った結果、わずかではあるが遺構を確認することが出来た。また、以前の踏査で水田、畑等の耕土や、郷原集落内にかなりの遺物散布を確認していたが、調査によってトレンチ内でも多量の土器小片が出土した。しかし、散布地＝遺跡（遺構）という理由には中々結びつかず、14本設定したトレンチでも極少の遺構を検出したような状態であった。

現地の状況は場所によってかなり削平されたり、相当の盛土が行われており、土層を見ても攪乱が激しく整然としていなかった。そのために、遺構の見落としなどで最終的には、わずかな遺構を検出したにとどまったのではないかと懸念される。また、遺構の掘り下げを行わず、トレンチの数も限りがあったので、遺跡の性格、時期等を明確にすることも容易でなかった。ただ、遺構の規模、出土遺物等から古墳時代～鎌倉・室町時代にかけての集落跡ではないだろうかと思われる。

以上のことから、今回の調査は必ずしも充分でなく、資料的にも限られたかたちになった。しかし、調査で得たことを、来年度に控えている本調査に活用すれば、郷原遺跡とこれに近接している前田遺跡との関連性の詳細が期待出来るとともに、郷原周辺の歴史が一層明らかになるだろう。

図 版

(I ~ V)



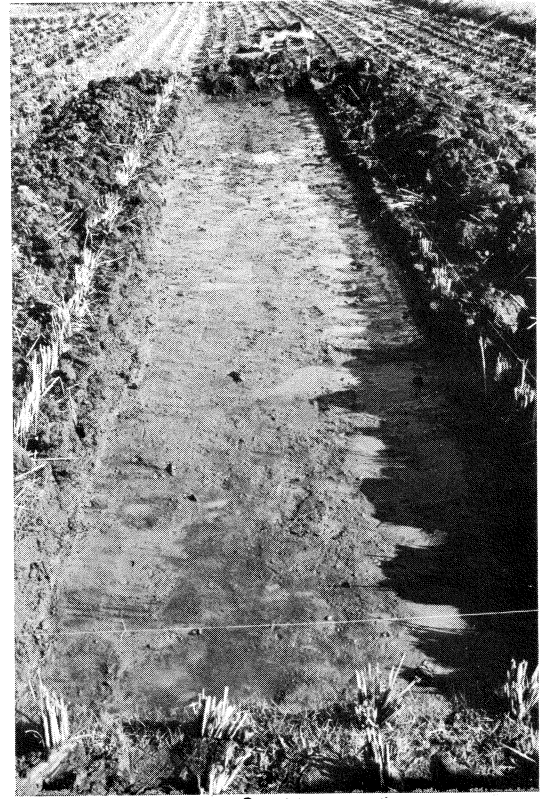
全 景 (北西から)



発掘作業風景 (南東から)



T-1 (東から)



T-2 (南西から)



T-3 (西から)



T-4 (東から)



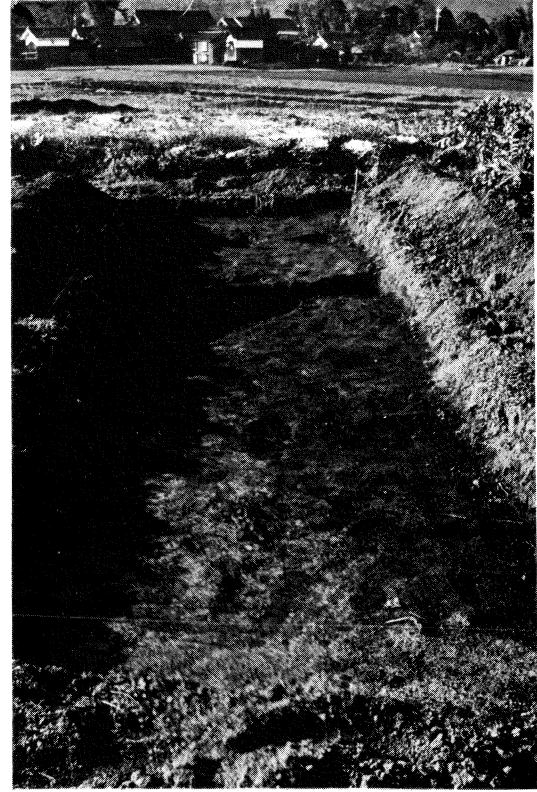
丁-5 (南から)



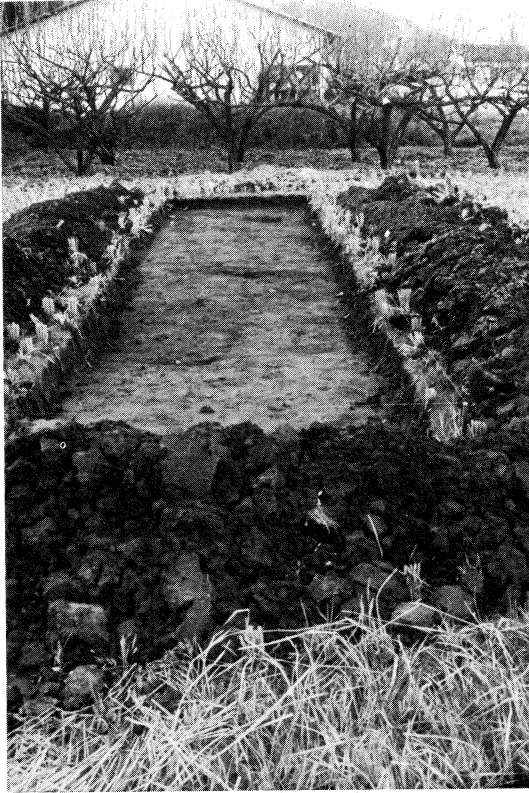
丁-6 (東から)



丁-7 (東から)



丁-9 (南東から)



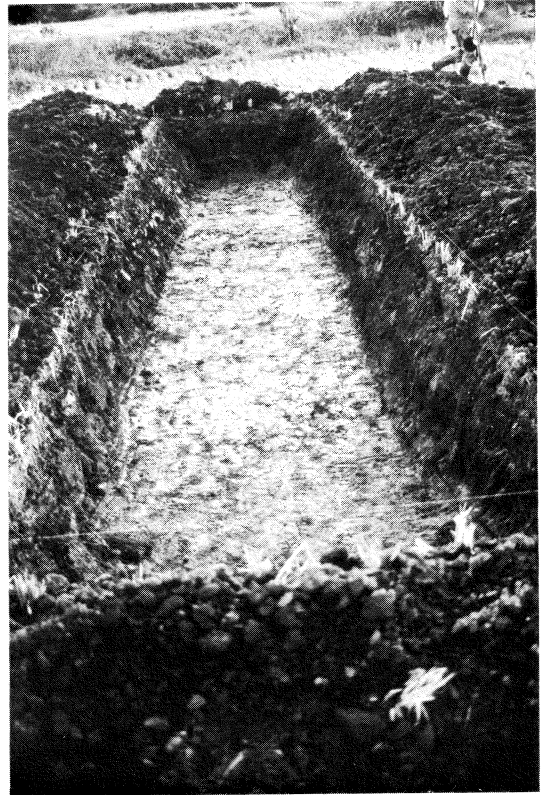
T-10 (東から)



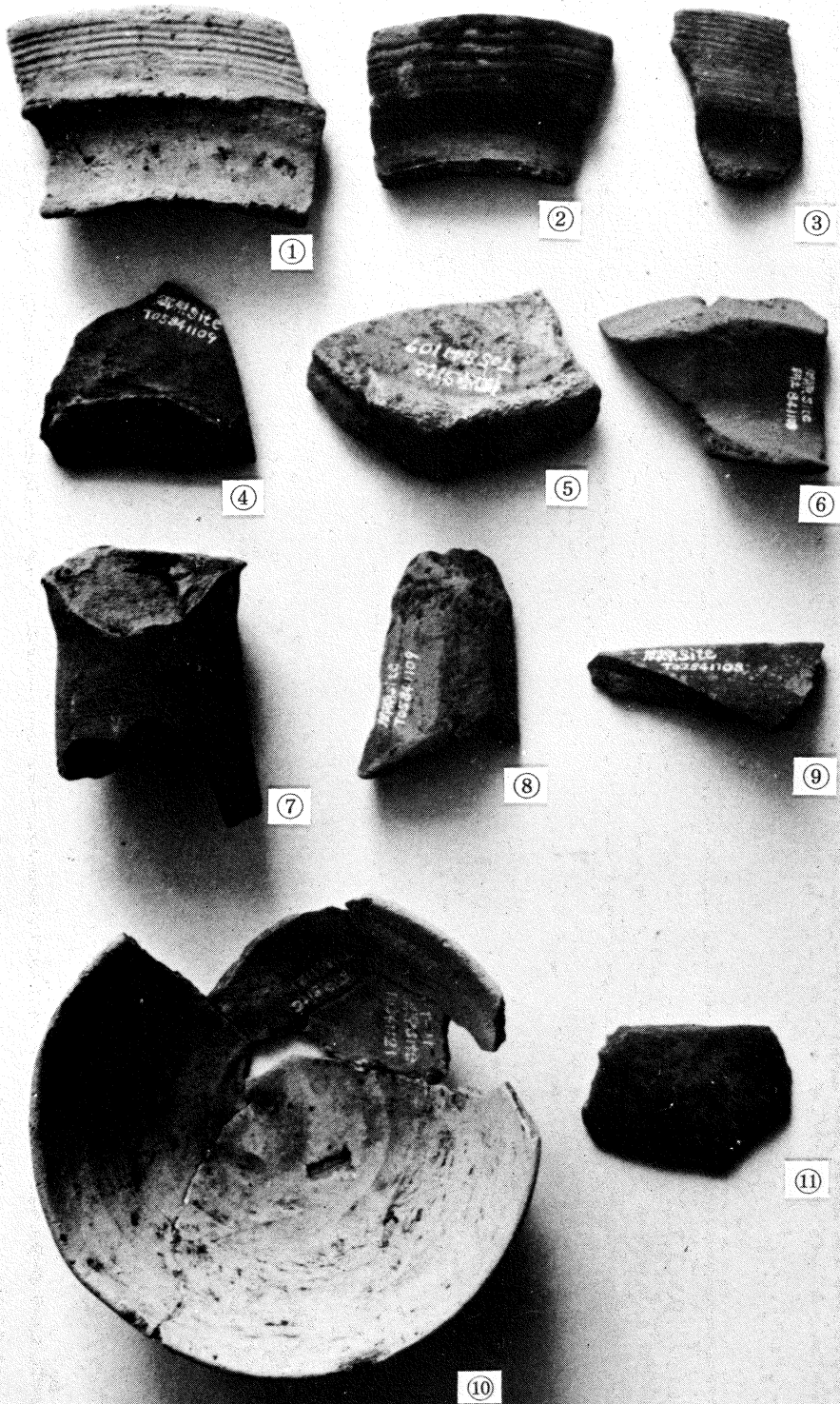
T-11 (北東から)



T-12 (北東から)



T-13 (北東から)



出土遺物

郷原遺跡分布調査報告

発行日 1985 (昭和60年) 3月

発行者 河原町教育委員会

〒680—12

鳥取県八頭郡河原町大字渡一木277-1

TEL (08588) 5—0011

印刷 谷岡印刷

〒680 鳥取市元町126

TEL (0857) 26—2001